

# DD NEWSLETTER

7-9 11/17/88

NO. 10

The Center for Southeast Asian Studies

Kyoto University

## 地村比較

## 「DD村移住者村訪問記」

DD村から「水田をとりめ」(Hã nã di) 地所へ一家を移住する場合があります。40年~10年前までにいくつかの村へ知られていす。行く先は KK 県西部の Ap. Chumpae, Uclon 県西部が多い。これらの方面の移住先のうち、比較的多くの家族が集中していす村、4ヶ村を訪問、その中の1ヶ村に宿泊した。

これらの村名、位置、インフォーマント名は以下通り。

- ① Ban Phai Khiet Nin, Tb. Chumpae,  
Ap. Chumpae

Amphoe Chumpae の南東 10 km 未満、

② Ban Wong (Phon) Thon, 1/2 F ① と ① U.

③ Ban Mookta, T.B. Nong Mttang.

Ap. Sibumuang, Ch. Udon.

Udon 西南 約 80 Km. Ap. Sibumuang &

Ap. Na Klang 西南 約 100 Km. ① U.

④ Ban Khint Din Chii (Mu 12).

T.B. Khint Din Chii, Ap. Na Klang,

Ch. Udon.

Udon の 西北 約 70 Km.

くすい程大なる面積と占有する二つほどである  
いと言われる。繪之に南田あり。

(村の自然立地)

いすいの村も middle terrace 上にある。ゆる  
やかな起伏がある。低位部には小川が流れるが  
泥濘原はなく、洪水害はほとんどない。高位  
部は面積的に限られ、固結層が表層に近く、  
水田に不適な場合(①, ②)は、荒地となっ  
ていす。水田にできる程の砂地はない。い  
すいの村も水田が主でも、とも南田の新し  
い Ban Mo Nua の場合のみ、南田されている  
高位部の一部畑作が行われている。塩害は  
ない。

(各村の南田史と現況)

①, ② Chumpae の場合

43年前(1940年), Thondii Maikhami が既婚  
の子供王舎を一族を率いて村を去った。当初  
Ap. Nong Saen の Ban Khok Pakung (現在の Nam

子に Mrs. Phorn の母, Mrs. Wandi は  
Pho Khen の母の祖母である Mrs. Ka と  
姉妹である)

(移出の理由)

D.D 村にはひどい洪水, 旱魃によって生活が  
不安定, 米が不足することと理由としてあげ  
る。必ずしも村の最貧層でなく, むしろ, 売  
るべき土地屋敷を持つていふ人々が移出でき  
る。貧しいと移出もできまいと言われる。

(移出の稼働)

既婚, 未婚の子供連と連れ, かりりの人数  
と子とめと移出する。牛車と連れ数日と要す  
る。村の若い者がいってさう。

(土地の獲得と開拓)

先住者から未墾地を安く購入する。普通 100  
フィート程度。連れと米に子供連に相続させると  
十分の面積である。一族の労働力に不足した

Phong 貯水池の北端(田)で既存の水田を購入  
 (土が不足のため、6年後この地に移り、  
 未墾地を購入し、開拓した。当時、①の Ban  
 Phai Khut Hin には100~150戸あり、土が、今の近  
 くの ② Ban Nong (Phon) Thon には10戸位あり、  
 Thon 一俵によろ不利と言、で  
 まい。現在 ①は200戸以上、②は40~50戸で  
 ある。

米は籾米生産を主とするが、DD村より籾  
 籾米があり、もち米とうるち米用に別々に米  
 倉をもつ。村に水牛は多くいるが、耕耘機が  
 普及してゐる。Champaeに近いため種々の農  
 業現金収入源があり、米以外に水田裏作のリュウグ  
 ヲが重要である。低位部の水田で、稲収穫前  
 後に散播し、1~2度、水を入れる。1トン  
 当り、1000バーツ程度の売上がある。ムン  
 ンフーマ  
 ントである Mu. Hwat の場合、自ら池を  
 つくり、今の周囲にマニョを主とする果樹園を  
 もつて  
 いる。

### ③ Ban Mo Nua の場合

Sirongyan 又は Nibongyan 姓の兄弟数人

1) 47年前(1936年)DD村を去り、6年間  
 Mong Saen にいた後、この村へ来た。当時、この  
 の4年前からここに先住していたLoeiの人か  
 ら戸籍があった。水田と陸稻焼畑をしていて、彼  
 等の1人から水田が1エーカーで買っている。  
 この兄弟に続いてDD村から多数がこの  
 村に来ている。現在、22戸あり、その中26  
 戸がDD村からの人達である。地はCh. Khon  
 kaenが多く、半分であるLoei果農出身者は今ほ  
 ほとんどいない模様。現在でも南極の余地が  
 残っているが、所有権は明確であり、かつ、  
 ほとんど未墾地である模様。DD村からの  
 も、ほとんど新しい移入者で、山の10年前であ  
 る。

村の景観は、30~40年前のDD村の様子に  
 似ている。多くの家が未だ完成してはいない。  
 米、粟は豊富である。余剰米、キャッサバ、  
トウモロコシは現金収入の機会ほとんどない。ハン  
 コウの生産が少いという。

我々が宿泊した家は、10年前にDD村から来

下 [redacted] の家である。家、家具、寝具、食  
 事、食器等とから推察可くはかなり豊かである。  
 二人の息子は都会で独立してあり、既婚  
 長女、未婚2、3女と共に移住して来ている。  
 全部で100ไร่を所有し、60ไร่を圃田し、残  
 りも圃田可能地である。

電気は無く、Amphoeへは1日1便のソング  
 トラックが2時間、10バーツで行く。10年前までマ  
 ラリヤが多かった。村の入口には砦があり、  
 今でも5~6人が夜警を司る。虫小屋は立派  
 なものが多し。寝泊り可く模様。棚にはぶんど  
 んに木を使用している。水田中には木が多く、  
 産米林の様相を呈する。家と棉を紡ぐ。親族  
 間、村民間の結束、協力がより顕著である様  
 子。

#### ④ Ban Khut Din Chii の場合

ソング一マシはDD村草分けの40戸の中  
 の一人に、現在のDD村の位置では無く、か  
 らりの村である、Ta Dan Teで生かしている。40~  
 45年前(40~50年頃)に2人移住してきている。



当時、才7に100戸ほどの家があり、才1000  
 の森林を買って自ら開拓した。現在、子供  
 達に相続させている。村は幹線道路沿にあり  
 小工市場がある。南坂村の村もかたはいい。

(土地購入(西経))

Ban Phakun

1940 水田  $\text{฿ } 6/\text{rai}$

1946 水田  $\text{฿ } 20/\text{rai}$

Champae

1947 未墾地  $\text{฿ } 11/\text{rai}$

Ban Mo Nua

1973 水田 60% }  $\text{฿ } 290/\text{rai}$   
 未墾地 40%

1940 水田  $\text{฿ } 10/\text{rai}$

1942 水田  $\text{฿ } 40/\text{rai}$

1965 未墾地  $\text{฿ } 30/\text{rai}$

Khut Din Chii

1938-40 未墾地  $\text{฿ } 80/\text{rai}$

## (新旧入植者の交替)

Ban Mo Nua では草分である Loei 出身者は今頃はとんといない。さらに土地を求めて移出しにと言われる。

DD 村の場合、Maha Sarakham 出身者が草分には多い。その後の移出者は Maha Sarakham 出身者が多く、現在、DD 村の主流は Roi-et 出身者である。

Leffer 氏の調査村 Ban Nong Phong (Ch. KK) では草分が戸で付なく、その後の Maha Sarakham からの移入者が、現在の村の主流となっており、このように新旧入植者の交替りと祖霊崇拜とが関係している可能性がある。可成り草分がルーアの始祖を祀るにとか、同時に領域全体に對する先住者の潜在的な占有権と意味し、新入植者は、偏制的に草分がルーアの祖霊信仰に参加を求められる。しかし、新入植者の数がある限度を越えると、もはや草分がルーアの祖霊崇拜に参加せず、したがって先住者の占有権を認めなくなる。ここに至ると

先住者は、さうに新天地を求め移住する。  
 あるいは、次のように言うこともできる。  
 耕作によつて土地所有権が生ずるといふのが  
 基本である。しかし、後続入植者は必ず先  
 住者から未墾地を購入してゐる。これは、草  
 分フルーブの特権と考へられる。この特権を  
 レジテ、メイトするが祖霊崇拜ではつからな  
 い。入植者の数が増加するにともなひ、集落の規  
 模が大きくなり、先住者にとつてメイトであ  
 る。しかし、新入植者に与へる未墾地が  
 消滅したとき、草分フルーブの特権も消滅する。祖  
 霊信仰の意味がなくなつてくる。

草分フルーブが下分に大きく、後続入植者  
 が少ない場合、未墾地が消滅しても祖霊崇拜  
 は存続しうる。

### (一般的印象)

東北夕日人の移住、入植は、既存社会から  
 の落後者によるもので決してない。むしろ  
 子供とくに娘の数が多し親が子供達の持

来とあるんは、新天地にたすたかう勇  
 気のある尊敬されるべき行岸と思われ。

東北の人の親睦同互助精神、近隣者互助精  
 神は、このような力を又においとも、とも  
 必要とするものであり、また、ゆれによっ  
 て強められこうと考えられ。

この東北の人にとり、このような行  
岸を行つた人物は、自らの近親者中にも。

## 「歴史人口学の試み」

武邑、ノンシンリによる系譜調査は、水田の相続と関連させたことにより、極めて興味あるデータをもたらした。これにより、DD村の水田域の最初の南拓者＝土地所有者の氏名が確定され（計5名）、その区画のそれぞれが現在いくつに分割され、その所有者が最初の所有者とどういう系譜上の関係にあるかが判明している。また、最初の所有者と現在の所有者との系譜上のつながりとした過程で、土地を相続せずに出た者の時期、移住先、系譜上の位置も判明した。これらのデータは、土地－人口関係の分析に極めて有意義であるが、人口学的分析に耐え得た精度は低い。

上記調査を補足し、人口学的分析に耐え得る精度の人口動態調査を目下行っている。その方法の概略は以下の通り。

①現在、在村している生産経験者全員に、

流産、死産、幼時死亡をとりとえよう、注意し

てから、妊娠歴を調査（完了済）。

② 在村者、そのまゝに、死亡、に（離村して）、両親に、ついで、在村歴を調査（継続中）。

③ に関する、いくつかの問題を以下にあげ

(1) 60才以上の在村者の死亡（離村）した両親に、ついで、在村歴の前半部分の記憶が確かでない場合が多い。

(2) 死亡、離村して、出生経験者の死産、幼時死亡が完全でない。

(3) 子供、まゝに、一人も村に残らず、死亡、離村して者が欠落する可能性がある。

(4) 過去、現在の在村者を、欠落なく、かつ、重複なく、教えるために、また、そのデータは、工場、農業と関連させ、分析する。ゆえに、過去のありし時期に存在した、あるいは現在に続く家計単位を識別し、その

と単位として データを収集し 集計可  
 三とが望ましい。しかし 実際には非  
 常に難しい。

上の最後の英(三)において、さらに述べる。  
 まず、D.D.村では単系制ではなないので、連綿  
 と続く家系といつてもいい。しかし、  
 歴史人口学的データで家系中心にするといふこ  
 とは不可能である。一方、土地の相続の実態  
 を見ると、両親の所有する土地は、在村一娘  
 夫婦に相続される場合が一般的である。その  
 相続のプロセスは以下の通りである。

結婚直後、夫は妻方に居住し、妻の両親と  
 同居し、家計を一にする。数年の後(妻の妹  
 の結婚に際する場合が多い)、村内に別居する  
 けれど、家計単位としては、ほとんど変わらず  
 状態である。その後、次第に妻の両親の農地  
 の一部の経営を任されるようになる。その収  
 穫物の処分権は漸次、娘夫婦に委譲される。  
 おお段階に至り、ほとんど経済的に独立する。

さらに、両親がある年令を越えれば、両親の  
 方が娘夫婦の家計に吸収される。(とくに、  
 未婚夫婦の場合)。しかし、地券の右義変更は  
 両親の死亡までなされない。以上の様態に鑑  
 みて、土地の相続は、娘の結婚に始まり、両  
 親の死により、て完結する長年月のプロセスで  
 あると考へることが出来る。  
 このよきを相続のプロセスが完結するまで  
 の期間、両親とこの在村の娘夫婦とは、多少  
 とは経済的に互助関係にある。この関係の程  
 度は、全くの同一家計の状態から、ほぼ独立  
 した状態まで様々である。一見、独立して  
 いるように見えても非常時の場合の互助、相  
 互保証の意味がある。有史人口学的データの  
 集計にあたっては、このよきを広義の米生産  
 と中心として、相互扶助を行なう親子からな  
 る教世帯をひとつの単位と見ることが出来る。  
 このよきを単位は、両親の死をもって発生  
 する。発生時の構成員は、両親と少数の既婚  
 娘夫婦、多数の未婚の子供達とからなる場合



が多い。息子がやがて結婚すれば、この単位から、妻方の単位へ移動する。やがて古い一戸両親と教祖の娘夫婦とが子孫とからなるようになる。そして、両親の死亡により、在村の娘夫婦の数は徐々に分裂する。

以上が本調査に下けたデータ収集、集計するに際して将来の分析の単位である。もともと、これはformとしての単位である。実際には様々なる変異がある。たとえば、息子しかいない場合、夫方居住の場合、両親の離離、死別、再婚の場合etc.がある。これら変異の問題があるにせよ、とにかく上述の単位によるデータの収集、チェックと現在行なっている。

以上の単位と広義の家計単位と呼ぶことはある。厂史人口学的データは、広義の家計単位毎に集計されることとなる。

経済活動と労働力及び扶養人口数との関係の分析は、広義の家計単位毎に可能となる。この単位の人口の合計値が村人口に地を占めている。広義の家計単位はいくつか欠落して

す。また、経済と人口との関係の分析は可能となる。また、広義の家計単位という仮定が成立する限りにおいて、村人口の産業人口学的一つに、ある程度の欠落があり、これも差支のないこととなる。

(福井)